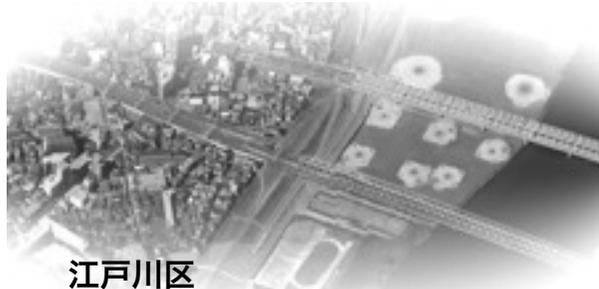


陳述書から にじみ出る苦悩



江戸川区

スーパー堤防取消訴訟を支援する会

はじめに

10月16日の第10回口頭弁論に向けて原告側から裁判所へ7名分の陳述書が提出されました。それらを読むだけで何とも言えない気持ちになります。こんなことが許されていていいのだろうか、心の中で何度もつぶやいてしまいます。原告の思いの限りを綴った文章はとても長くて、すべての文章は掲載できません。個人名を出さないようにもしてはなりません。そこで陳述書の中から部分的に文章を抜き出し、新たに構成しなおしました。ひとつひとつの陳述書を読むことにはかたがたありませんが、垣間みるだけでもきっと思いは伝わってくると思います。

「スーパー堤防」が突然やって来た。 なぜ、なんのために

有意義な事業のためならあきらめません。私や夫が許せないのは、私たちを追い出す理由となっている事業が何の役にも立たない事業だからです。私はここに50年住んでいますが、その間、洪水の被害など一度もありませんし、大きな台風や豪雨災害があっても、この地域は浸水被害に一度もあつたことがありません。なぜよりによって、ここに、それにもかかわらず100メートル程度のスーパー堤防を作る必要があるのでしょうか。丈夫な地盤の上になぜわざわざ盛土をして傾斜を作らなくてはならないのでしょうか。(Aさん82歳)

今でも、私は、なぜ北小岩の地区でスーパー堤防事業が計画されるのか理解できません。理解できない計画のために自分たちの生活が取り上げられ、悔しいような情けないような気持ちです。私は、北小岩の自宅を出て引っ越してしまいましたが、今も北小岩に住み続け、反対の声をあげ、裁判までしている住民の人たちには、どうか頑張ってこの不当な

事業をやめさせてもらいたいと願っています。(Bさん87歳)

そもそもなぜ長い江戸川の中でこの地域だけにスーパー堤防を作る必要があるのか、全く理解することができません。千葉街道とJRにはさまれた狭い地域で、とりあえず実績を作るのに容易な場所だからだと思えません。区の職員は説明に来る際、スーパー堤防を作らないと上一色の方まで水浸しになってしまうと説明していましたが、100m程度の距離にスーパー堤防を作ったとしても、周りが同じようになっていなければ、全く意味がなく、区の職員の説明も納得のいくものではありませんでした。区の職員は区民のためと言っていますが、それならばもっと危険な地域から実施するべきものであり、これまで問題のなかった、しかもこんなに狭い地区だけ税金をかけて実施する必要はないはずです。

(Cさん74歳)



昔から江戸川区では、危ないのは現在区役所のある中央、船堀、平井地域であったと聞いています。特に中央の地域は、幾度となく内水氾濫を起こしていると聞いています。しかし、江戸川区の本件事業担当者は、そのような歴史的な事実について何にも理解をしていません。だからこそ、本件事業の説明会において、出席した住民に対して「この地域は、三方を線路と道路に囲まれている窪地で、雨が降った後に歩くとカビ臭く、家の中に於いては湿地帯であろうから、土地を高くしてやって…」などと発言できたのだと思います。

本件地域に居住する方々は、私や私の母と同じように、長年にわたり本件地域に住み続けてきた人ばかりです。本件地域に洪水や内水氾濫の危険があるのかどうかは、長年にわたり本件地域で生活してきた私たち住民が最もよくわかっています。その私たち住民に対して、上記のような発言をした江戸川区の担当者に対しては、憤りと怒りを感じずにはられません。このように何ら歴史的事実を認識せずに本件地域の治水対策の必要性を無理強いし、今住んでいる家を捨て、いったん本件地域から出るという不

利益を甘受しろと言われても、それは私たち住民にとって到底受け入れられないことです。（Gさん54歳）

出て行けない事情だってある

区の職員が尋ねてきて、建物調査に応じてもらっていないが、お宅と同程度の建物を参考に、外から見たところ保証金は1000万円くらいでどうですか言われました。夫には700万円くらいでと言ったそうです。区の嫌がらせかもしれませんが、リフォームに1000万円以上かかった家を取り壊して、どうやれば1000万円で新しく建替えることができるのでしょうか。私は82歳、夫も76歳で、住宅ローンを組みなおすことはできません。今の家を取り壊してしまえば、私たち夫婦は新たに家を建てることなど出来ません。（Aさん82歳）

私は家を事務所にして長年、水道業の事業をやっており、周辺地域の方々が古くからのお客さんなので、あまり離れた場所に引越しをすることはできません。引越しにより仕事が一時的にでもできなくなれば、お客さんにご迷惑をかけるこ

ともなりますし、今後仕事に来なくなる可能性もあります。そのため、引っ越す場所によっては、長年続けてきて、これからも健康なうちは続けていこうと思っていた仕事も辞めなければならなくなってしまふかもしれません。（Cさん74歳）

これが区の職員のやることか

私が、はじめてスーパー堤防事業の話を目にしたのは、今から5年以上前のことです。当時私は毎日仕事に出ていたこともあって、事業の内容について詳しくは分かりませんでした。周りの皆さんが皆反対していたので、このように深刻な事態になるとは思っていませんでした。ただ、私が仕事から帰ってくると、玄関のドアやポストに区のお知らせやニュースがよく挟まっていたし、区の職員がしつこく訪ねてきて困るといった話も聞いておりました。私自身も仕事が休みの日に庭の水撒きをしていたところ、区の職員がすばやく私を見つけて寄って来たことがあり、まるでこの地域全体が監視をされているようなうす気味の悪い気分になったことがありました。

今一番辛いことは、区の職員が私や夫のところに来ては、家の査定に応じていないのはお宅を入れて残り何人しかいない等々と言って、攻め立てられることです。80歳をすぎて心筋症を発症しましたが、主治医によるとストレス性のものであるとのことです。間違いなく本件事業が私の体に影響を与えております。(Aさん82歳)

一旦自宅を離れてどこか別の場所で暮らすとしても、仮住まい生活が何年続くのか分かりませんし、それからまた戻って家を建てる時には、自分が一体何歳になっているのか分かりません。そして、これらの点について、江戸川区からは、明確な説明は何もありませんでした。そのため、私は、計画していた自宅の建替えについても話を進めることもできず、困り果ててしまいました。

近所の人たちは、江戸川区の先行買収に次々と応じ、引越しをしていってしまいました。親しい人がどんどん引っ越していき、見慣れた家が建て壊され、住民が減っていく様子を見ているのは、なんとも言えない気持ちでした。(Bさん87歳)

区の職員は、戸別訪問をした際に、「盛土はしっかりやるので安全です。」などと簡単に言うので、私の方も腹が立ち、「そもそも全国どこに行ったって、盛土はちゃんとやりません、などということ言うはずがない。ちゃんとやりませ、と言っておきながら、崩れたり問題が生じたりしているんじゃないか。」等と思わず言ってしまったこともあります。最初の頃は、このような区の職員がくるのが精神的な負担となっていました。(Cさん74歳)

〇〇さんにいたっては、こちらから電話をしても電話にさえ出してくれなくなってしまいました。聞いたところでは、本件事業の関係で江戸川区の担当者が2週間に1回のペースで、〇〇さんの家を訪問し、本件事業についての説明をしていったとのことでした。そのため、〇〇さんご夫婦は、人と話をするのが怖くなり家にこもるようになってしまったとのことでした。

それでも、〇〇さんの奥様と私とは交流がありました。以前ほどの頻度ではありませんでしたが、〇〇さんの奥様から私の家に電話をかけてきて、私の家で話

をすることが何度かありました。もっとも、話の内容は、以前のような楽しい昔話ではなく、本件事業に関わる悩みでした。〇〇さんは、新築してから10年程度の家に住んでいたのですが、その点について、「終の棲家として建てたのに、もし、ローンが残っているにも関わらず、この家から出て行かなくてはならないとしたらどうしたら良いかわからない。」と深刻な顔で言っていたことを覚えています。学校の先生をやっており、非常にまじめだった〇〇さんは、この問題に悩み、大きなストレスを抱えていたのだと思います。

その〇〇さんのご主人は、昨年が発生した火事によって亡くなってしまいました。奥様は今、親戚の家に引き取られて、そこで生活をしていると聞いています。私には、本件事業の話がなければ、〇〇さんの火事は防げたのではないかと思わずにはいられません。〇〇さんが以前と同じように、近所の方々とつながりを持っていれば、地域みんなで〇〇さんご夫婦を注意深く見守ってれば、このような火事は起こさずにすんだのではないと思わずにはいられないのです。

(Dさん84歳)

江戸川区は、平成20年（2008年）に、株式会社日建が所有していた地区内の6階建てのビルを取得してから、地区の人たちに、土地を江戸川区に譲るよう働きかけを始めました。日建のビルを取得した江戸川区のやり方は、極めて横暴です。住民の合意形成も行わず、密かにビルまで取得して、後戻りできないところまで事業を進めているわけです。ある江戸川区の職員は、「雨上がりにこの地区を通るとかび臭い。家の中は湿地帯みたいだろう。事業でこの状況を解消してやるんだ」などと失礼なことを言っていました。また、ある江戸川区の議員は「ほかにもやることはたくさんあるのだが、ここに税金を投入してやろうというのだ。」と私に言っていました。江戸川区は、こうした一連の準備を、法律で決められている意見聴取の手続きや事業決定の何年も前から推し進めていたと思われる。（Eさん60歳）

平成18年（2006年）ころから江戸川区の職員が、何回も本件地区の住民に戸別訪問を繰り返していたことが大きいと思います。区の職員は、日中家に女性やお年寄りしかいない時間帯に、2、

3人でまちづくりニュースを持って、家にやってきました。まちづくりニュースは月1、2回のペースで発行されるのですが、その度に区職員が訪問してくるので、私も幾度となく、その対応をしています。この戸別訪問の際の区の職員は、とにかく横柄な態度でした。

私は以前、玄関先で区の職員から突然大声で「ここはスーパー堤防になるんですからね！そのための資料をもって来たんだから、よく読んで下さいよ！」と言われたことがあります。私はびっくりして、「誰に向かって言っているんですか。」と苦情を言ったことがあります。区の職員の説明は、もう本件地区はスーパー堤防になることは決まっているんだから、いずれ出て行かなくてはならないという前提でした。（Fさん52歳）

本件事業の話が持ち上がり、江戸川区が強引に事業を推し進めた結果、すでに本件地域は、破壊されつつあります。江戸川区は、本件都市計画決定前に、先行買収をどんどん始めてしまいました。その手法は、住民意思を尊重するという意識のかけらもないものであり、とにかく先行買収により既成事実を積み上げよう

というものでした。この計画は「住民ありき」である筈の行政とは掛け離れた、「先ず計画ありき」の酷いものです。また、江戸川区の担当者は、お年寄りや主婦だけが家に居る昼間の時間帯に、戸別訪問をして「まちづくりニュース」を配り、高圧的な態度で、本件事業について合意を得るための説得をしてきました。その結果、住民は、先行買収された家が突然壊されていくのを目の当たりにし、ただでさえ不安な気持ちを抱える中、この事業が絶対必要で、すでに決まったかのように話す職員に強いストレスを感じてきました。住民の中には、そのストレスで入院をしてしまった方や、いつも近所を散歩していたのに、役所の人間に会うのが恐怖となり、家に引きこもってしまった高齢の夫婦もいます。

もっと酷い例として、ある住民は、親しくしていた隣家が先行買収に応じ、その隣家の取り壊し工事の振動で家に大規模な亀裂が入り、隣人がいなくなってしまうショックと家に亀裂が入ったショックでノイローゼ状態に陥り、何度か心労で倒れ入退院を繰り返した後、とうとう施設に入所してしまいました。

（Gさん54歳）



追い出された者の気持がわかるか

誰もが心の中では反対していると思います。特に年寄りの人たちは、賛成派と言われている人たちであっても、心の中では反対しています。みなさん、立派な家を持っていて、自分の余生を安心してここで暮らしたいと考えています。今の家を取り壊して、3年も4年も知らない土地で暮らしたいと思う年寄りがいるわけがありません。この地に嫁いで来た嫁仲間の〇〇さん、〇〇さん、〇〇さんな

どはみんな、二度とここには生きて戻って来れないと思っています。みんな心の中では泣いています。ある方は、私に言いました。「本当は反対だけど、娘夫婦に任せているので何も言えない。」また、ある方は、私にこう言いました。

「心の中では、反対だけど、お上のすることだから反対はできない。お上の仕事だからきつうまくやってくれと思う。」この時代に「お上」などと時代錯誤のことを言う人間をお笑いになるかもしれませんが、年寄りはそのように考え

て反対を口にできない人も多いのです。また、何人かの人から次のような本音のせりふを聞きました。「どうしても必要ならば、私たちがみんな死んでからやって欲しい。」と。(Aさん82歳)

いざ引越しを決めたものの、当時私は体調が悪く、引越しの準備はほとんど妻に任せてしまい、妻はとても大変そうでした。〇〇市の新しい自宅は、北小岩の自宅よりも狭いため、持って行ける荷物が限られてしまい、その選別が特に大変でした。長年暮らしてきた家ですから、思い出の品や、愛着のある物がたくさんありました。妻は、思い出として、家の床柱を切断して持っていくことにしました。他にも、持っていきたい物がたくさんありましたが、諦めた物がたくさんありました。私が一番つらかったのは、自宅の庭に生えていた柿の木が切られてしまうことでした。その柿の木は、私と一緒に育ってきた木で、素晴らしい実を実らせ、家族でいつも楽しみにしていた思い出のある木だったのです。

何よりも、近所に顔見知りの住民がないことが、とても寂しいです。新しい自宅はマンションですので、同じマン

ションの人たちと、顔を合わせれば挨拶程度はしますが、付き合いは希薄です。もともと、私は趣味もないため、新しい付き合いを作るのも難しいのです。引越しをしてからは、何をするにも意欲が湧かず、何か新しいことを進んでやろうという気持ちになりません。引越し後、私がいつも、「新しい家の近所には友人がない。話し相手がいなくて寂しい。前の家なら、外を歩けばいつでも顔見知りに出会ったのに。」などと言っていたら、子供たちから心配され、早く気持ちを切り替えるように言われましたが、なかなかすぐには気持ちを切り替えることができません。私は、今でも北小岩の老人会に籍を置いており、集まりがあるときには参加しています。〇〇市から北小岩まで行くのは遠くて大変ですが、顔なじみの人たちに会えると思うと嬉しく、これからも参加するつもりです。ただ、老人会の仲間のなかには、それぞれ引越しをして連絡が取れなくなってしまった人たちもおり、寂しく思います。

引越し後、北小岩の自宅の解体を行うとき、私は見に行くことは出来ませんでした。見たらきっと、どうしてこんなことに

なってしまったのかと苦しくなると思ったからです。建て壊し後も、敷地を見に行ったことはありません。自宅がなくなり、空地になって雑草が生えているような敷地を見るのは嫌なのです。(Bさん87歳)

いい街だった

この場所に決めたのは、実家の両親の家に近かったからです。丁度、子供が中学校に入学するころで、その後この場所ですっと生活をしてきました。昭和55年当時も現在とほとんど変わりがなく、ずっとこの地域に住んでいる人が大半で、私達家族はむしろ新参者という感じでした。(Cさん74歳)

温かい人情が通う土地柄でした。時を経て代が替わっても、昔からここに住んでいる人たちを中心に近所づきあいが続いていました。特に年寄りたちはお互いに頼りにして、しょっちゅう互いの家を行き来し合い、とても仲が良かったと思います。(Aさん82歳)

人と人とのつながりを大切にしている非常に温かい地域でした。堤防、鉄橋、橋に

囲まれた限定された地域であるため、近所の人たちはみんな顔見知り、道端で会えば気軽にあいさつをする関係がありました。だからこそ、見ず知らずの第三者が町内を歩いていれば、すぐにわかり防犯上の観点からも非常に安心な町でした。(Dさん84歳)

私の子どもの頃、私の母たちが、近所の子どもたちみんなを連れて千葉の保田まで海水浴に行ったこともあります。本件地区は緑が多く、江戸川の河川敷も子どもたちの庭のようで、友だちとよく遊んでいました。私たちが大人になってからも、近所づきあいは続いています。(Eさん60歳)

本件地区は昔ながらの近所付き合いが残っている地域で、とても住みやすい地区でした。夕飯のお裾分けをしたり、田舎のお土産を持ち寄ったり、江戸川の花火大会があれば、近所に声をかけてみんなで一緒に見に行ったりしていました。私は子供が二人いたので、子供が小さいときなどは、近所の子供たちを集めて自宅で月1回程度の映画の上映会を開催したりしていました。また、人の出入

りがほとんどない地域なので、ご近所の人とはみな顔見知りで、本件地区外の人が入ってくるとすぐにわかるため、防犯上も安心できました。（Fさん52歳）

街も人情もこわれてゆく

この地域の住民が賛成派と反対派に別れてしまっただけからは、みなさんが外出をできる限り控え、近所の人たちとの接触を避けようとするようになったように思います。私自身、お隣の〇〇さんと庭で会うこともなくなり、世間話をするようなこともありません。（Dさん84歳）

私は、自宅の周りに子どもの頃からの知り合いがたくさんいるのですが、事業計画が持ち上がってからは、計画に反対か賛成かを意識しながらつきあわなければならなくなってしまいました。中には、私が挨拶しても、私が事業に反対しているからなのか、挨拶を返してくれなくなった人もいます。（Eさん60歳）

この計画が持ち上がり、約8年が経ちました。その間、本件地域では、先行買収された土地が更地になり、まるで爆撃

を受けたような土地になってしまいました。この街は、何代も前から住んでいる方も多く、コミュニティーの暖かな歴史がある土地だったにもかかわらず、そのコミュニティーは面影もありません。たとえここに新しく「スーパー堤防と一体化したまちづくり」が成されたとしても、破壊されたコミュニティーは戻ってきません。つい最近まで、おかずのやり取りや、田舎から送ってきた野菜などを、分け合ってきた関係は、完全に壊れてしまい、気楽な立ち話もなくなってしまいました。本件地域をこんな街にしてしまった江戸川区の責任は重いと思います。（Gさん54歳）

水害とは無縁な街だった

平成17年ころ、私は、本件地区にスーパー堤防を作るという計画を聞きました。私は、「どうしてこの地区でそんな話が出るのか。」と疑問に思いました。私は、昭和22年のカスリーン台風のときに既に本件地区に住んでいましたが、そのときですら、本件地区には全く水が来なかったからです。（Bさん87歳）

記憶があるのは、昭和33年の時の大水です。この当時は、私は既に宮城から東京に戻り夫の実家のあった北小岩地域で生活をしていましたので、実際に大水を経験しています。当時、私は、自宅近くの一里塚バス停からバスに乗り、亀戸9丁目まで通っていました。仕事からバスで帰宅しようとしたところ、亀戸付近は水浸しの状態で、京葉道路も錦糸町、両国方面に向かって水があふれている状態でした。そのため、バスに乗り帰宅することはできず、やむなく当時江東区北砂町に住んでいた自分の両親のもとへと向かいました。北砂町には何とかたどりついたものの、すぐに北砂町もひざの高さ程度まで水があふれてきて、私と両親は、砂町第3小学校の体育館で一晩過ごすことになりました。結局、この大水では、私の両親の家も床下まで浸水し被害を被ったことを覚えています。

亀戸から北砂まで広範囲にわたり水浸しになっていたのですから、当然、自分の自宅のある北小岩地域も何らかの被害を受けているものと思い、私はドキドキしながら帰宅しました。しかし、帰宅してみると自宅はまったく被害を受けてお

らず、聞いたところでは北小岩地域では、一切大水は起こっていないとの話でした。この時私は、北小岩地域は大雨に強く、大水や洪水が起こりにくい地域であることを改めて強く実感したのです。

(Dさん84歳)

本当に安全な土地なのか

私の家は、区の計画によると6メートルの盛土の上に建てることになるそうです。私は、盛り土事業の話を聞いてから、何人かの工務店に盛り土の上に家を建てる時に杭を打てるかを聞きましたが、とんでもない費用がかかるとのことです、ビルを建てるのでなければ杭など打たないと言われました。

頻発するゲリラ豪雨などが襲ったときに、盛り土が壊れないことを区は保証してくれるのでしょうか。家が流されたり、傾いたときに、区はその損失分を補償してくれるのでしょうか。誰も補償などしてくれないでしょう。そのような危険で不安の尽きない盛り土（堤防）の上に家を建てて住むことなど絶対にありえないことです。(Aさん82歳)

事業が終わった後は、盛り土の上の土地に戻ってくるようになります。盛り土は短期間で作られた人工の地盤であり、信頼度が低く、その上に建物を建てることには大きな不安を感じています。震災でもスーパー堤防を含む多くの盛り土で地盤の問題が顕在化したのを目のあたりにして、その不安はさらに大きくなっています。また、盛り土のために用いられる土に、何か人工物が混じっていたり問題はないかという点も心配です。さらに、江戸川区や国が約束通りの工事をしてくれるか、十分信頼することは難しいです。新たに建てた家の地盤が不同沈下したりしたら本当に困ります。(Eさん60歳)

近年、東京直下型地震がこの数年で起きるであろうと予測されており、それに対する準備を整えなければならないと言われています。

そのような状況の中、前述した強固な地盤を持つ本件地域の上に、あえて7メートルもの盛り土をした人工的な土地を造成し、その上に住宅地をつくるなどということが、果たして住民の安全を守ることになるのでしょうか。そもそも、そのよう

な人工的に盛土された土地が大震災に耐える安全性を有していると言えるでしょうか。私は自分の土地を危険な盛土にされ、その上に家を再建築することなど怖くて到底出来ません。(Gさん54歳)

ただ、当たり前前生活をしたいだけ

私を含め、本件訴訟で原告となっている方々には、本件地域に長年にわたり居住し、そこに積み重ねてきた歴史があります。その中で、ともに笑い、ともに楽しみ、そして時にはともに泣くコミュニティを作り上げてきたのです。

そんな、私たちが望む唯一のことは、今までどおり本件地域で普通の生活を送りたい。終のすみかを決めたこの地で死ぬまで生活したいということだけです。しかし、本件事業により、そのささやかな願いは、もろくも壊されようとしています。それぞれの幸せ、それぞれの苦勞、それぞれの思い出、本件地域に積み重ねてきたそれらすべての歴史が、何の必要性もない本件事業により今まさに奪われようとしていること、そのことが、私は、悔しくてたまりません。(Gさん54歳)